

博士学位請求論文審査報告書

申請者： 藤井 崇

論文題目： 室町期大名権力の研究－周防国大内氏を事例として－

1、本論文の主題と構成

本論文は、日本の南北朝・室町期（14世紀前半～15世紀後半）における地域支配の実態を、周防（山口県東部）を中心に広く北九州から中国地方を支配した大内氏権力の分析を通じて解明したものである。当該テーマに関しては、以前は守護が独自の領国支配を展開させていく面を重視する「守護領国制」論が主流だったが、近年は將軍から与えられた「守護公権」を重視する「室町幕府一守護体制」論が主流となっている。このように相反する評価がなされてきたが、ともに具体的実証が十分伴っていないという問題を残している。そうした中で本論文は、精緻な実証研究によって大内氏の領国支配の実態を具体的に検討し、「守護公権」に拠らず独自の領域支配を発展させていく姿を明らかにし、その結果を踏まえて「室町期大名権力」という新たな概念を提唱した意欲作である。

構成は以下の通りである。

序章

- 第1章 鎌倉期「長門探題」の実態－北条仲時を中心として
- 第2章 南北朝期長門国における厚東氏権力と弘世期大内氏権力
- 第3章 「康暦内戦」について
- 第4章 義弘期大内氏権力の分国支配
- 第5章 盛見期大内氏権力の分国支配と大内氏被官
- 第6章 持世期大内氏権力の分国支配と大内氏被官
- 第7章 教弘期大内氏権力の分国支配と「大内氏御家人制」
- 第8章 政弘期大内氏権力の周防・長門国支配

終章

2、本論文の内容

序章で研究史の流れを説明し、現在の到達段階に関する筆者の見解を述べている。第1章～第8章が本論で、まず先行する「長門探題」・厚東氏の支配を検討し、以下、大内氏当主の代ごとに時期区分し、支配の実態を検討している。

第1章では、鎌倉幕府により設置された「長門探題」の歴代を確定するとともに、後期の北条仲時を中心にして南北朝・室町期の大名支配に通じる地域的公権力の萌芽を見出せると主張している。第2章では、建武政権下で長門守護となった厚東氏と、それを滅ぼした大内氏の政治姿勢に、幕府公権への依存性と地域公権力的自立性という違いが存在したことを指摘し、これを、鎌倉末以来の地方分権的動向に、中央集権的なものが敗れた象徴的出来事と評価している。

第3章は、大名大内氏の第2代義弘が家督に就く契機となった内戦の性格について検討したものである。第4章は、その義弘の領国支配を検討したもので、義弘は応永の乱で足利義満に敗死はしたが、在庁官人（国衙の現地役人）の被官化・郡単位での徴税機構の構築など、室町幕府体制から離脱しうる支配体制を整えつつあったとし、こうした自立的支配体制と、利害対立が起きれば幕府との合戦も厭わない外交・軍事方針は、後代の当主に受け継がれたとしている。第5章では、30年の長期にわたる第3代盛見期において、被官の編成・行政機構の整備が、第一の画期とされるほど進展したことを解明している。また、盛見は寺社造営・儀式催行を積極的に行ったが、これには公権力としての立場を誇示する目的があったとしている。第6章は、第4代持世期の検討にあてられ、史料的制約で内政関係は詳かにできないが、大友・少弐氏らに対する軍事的成功と寺社優遇政策により、室町後期（15世紀中葉以降）の西国における声望を高める基礎を作ったとしている。第7章は、第5代教弘期の検討にあてられている。その特徴は以下の通りである。この期になると、代を重ねることにより家臣の間で、「一門被官」か否か・役職・所領高などを基準に、「宿老」・「御殿人」などの家格が定まってきた。これに対応して行政形態も制度化が進み、吏僚業務の価値・権威も上昇した。第8章は、第6代政弘期の検討にあてられている。この期には応仁の乱で畿内を転戦する政弘に代わり、「宿老」の陶弘護が「山口留守衆」筆頭として強い権限を振るったが、弘護が吉見信頼（石見国人）に殺害されてからは、評定制度の導入など支配機構の整備が進められ、政弘の意思が貫徹するようになった。それとともに、勘気に触れたものの処罰規定が何度も制定されているように、政弘の権威上昇も図られたという。

終章では、本論部分（第1章～第8章）での実証分析をふまえて、南北朝・室町期の周防国大内氏権力の特徴を、軍事・外交面、内政面、被官編成面、文書行政面に分けて以下のように総括している。軍事・外交面では、領国東部に位置する山陰地方の山名氏と友好関係を結び、本国である周防・長門の安全を確保した上で、領国の西南に位置する九州方面への進出を図るという戦略をとっていた。幕府との関係は、こうした枠組みの中で交渉や一部との対立があった。内政面では、直轄領支配と寺社領支配に重点が置かれた。大内氏権力は、それらの所領に対し検注を行い、各種支配のための帳簿を作成し、土地紛争に対しては独自の法を制定して種々の裁判を行うなど、戦国大名にも通じる先進的支配を展開していた。また、一般被官の所領に対しても、直轄領を割いて与えた新恩給地を中心に強い介入が見られ、被官統制に重要な意味をもった。被官編成面では、同姓（多々良姓）一門の被官のみならず、他姓の被官も数多く編成し、室町期中葉までには彼らを行政機構の各種の役職に登用するようになった。それらをふまえて、「宿老」・「御殿人」・一般被官の家格が形成されていった。文書行政面では、行政機構の整備とともに奉行人奉書形式の文書が、基礎的な発給様式として採用された。さらに、大内氏当主の京都在住に伴って、「京都衆」・「山口留守衆」がそれぞれ連署する書状が作成されるようになった。また、奉行人からの上申を経て当主から下された命令書の様式も見られ、各種の問題に弾力的に対応していた様子がうかがわれる。政弘期には袖判下文様式の文書が多く発給されるようになり、大内氏当主の権威が上昇したことを物語っている。

次いで、このような実証研究の成果を基に、序章で紹介した守護領国制論・室町幕府～守護体制論・地域社会論をふまえた守護論の問題点を指摘している。守護領国制論に関し

ては、実証の裏付けに乏しいという批判だけでなく、当該期の領主制の代表という守護の位置付けに対して、国人領主こそが地域社会と直接対峙していたと批判する。また、守護の典型を細川氏など足利氏一門の在京守護に求めていることも、南北朝・室町期の地域支配の特徴としては問題があるとしている。室町幕府～守護体制論に対しては、黒田俊雄氏の権門体制論が無前提的に前提されており、「守護公権」なるものの実体（地域支配に果たす役割）が具体的に論証されていないと批判する。地域社会論をふまえた守護論は、室町幕府～守護体制論を批判し、守護を地域社会の展開の中から成立する公権力として評価する最新の研究であるが、惣村が広汎に成立した畿内社会の事例をそのまま遠国等にも適用し、守護支配に対する民衆の規制を過大評価していると批判する。こうした研究史批判を踏まえて、筆者は、国人領主層の統合の上に成立し、「分国を維持する上で守護職の補任を必ずしも必要不可欠としない西国の守護権力」を「室町期大名権力」と規定することを提唱している。具体的には、大内氏の他に伊予河野氏・筑前少弐氏・豊後大友氏・肥前菊池氏・薩摩島津氏である。

3、本論文の評価

室町期における地域支配の実態解明は、筆者の研究史整理にもあるように、従来から必要性が指摘されていたが、戦国期に比べて残存史料数が圧倒的に少ないため、なかなか進められないできた。そうした中で、本論文の第一の意義は、意欲的な史料博搜により、大内氏歴代の支配の実態を、軍事・外交面、内政面、被官編成面、文書行政面など、多岐にわたりこれまでになく緻密さで明らかにしたことである。本論の各章は、ほとんどが学会誌に査読論文として掲載されており、すでに高く評価されているところである。第二の意義は、「守護領国制」論に始まる先行研究を広く厳密に検討し、その到達点と問題点を明らかにするとともに、自らの実証研究の成果を踏まえて、新たに「室町期大名権力」概念を提唱したことである。近年、ともすれば若手研究者が研究史と自らの研究との緊張関係を希薄化させがちなか中で、研究史を真っ正面から受けとめて新たな問題提起を行ったことは高く評価され、今後大きな議論を呼ぶものと期待される。

とはいえ、問題点が残っていることも指摘せざるをえない。最も大きいのは、「室町期大名権力」概念の有効性である。これは、主として大内氏権力の分析を通じて導き出された概念であり、大内氏の全国政治上の位置を明らかにしなければ、その妥当範囲を明確にすることはできない。その意味で、大内氏を主たる検討対象として取りあげた理由について、上述のような観点から、より踏み込んだ説明が求められよう。しかし、この問題点は、今後、他の「室町期大名権力」の検討などを通じて、より総合的な立場から解決すべきものであり、本論文の価値を損なうものということとはできない。

4、結論

以上述べてきたように、本論文は若干の問題点は指摘されるものの、全体としてみれば、積極的問題提起を行った意欲作と評価できる。2009年7月23日に行われた口述試験において、筆者が上記の問題点を十分に認識し、今後の重要課題として取り組む用意のあることが確認できた。また口述試験では、目次や表・各章の初出などの表記方法といった技術的な問題も指摘され、リライトの上最終論文を提出することとなり、9月14日に提

出された。

審査員一同は、口述試験の結果、および最終論文の内容に対する総合的評価に基づき、藤井崇氏に一橋大学博士（経済学）の学位を授与することが適当と判断する。

2009年10月14日

審査員（50音順）

池 享（委員長）

江夏由樹

大月康弘

若尾政希

渡辺尚志